



弘大出版会 教員、学生が学内活動 研究成果発信の場に

弘前

地域課題テーマの本も

弘前大学資料館で行われている同大出版会の展示

弘前大学内の共同教育研究施設として2004年に発足した弘前大学出版会はこれまで、地域課題を取り上げた書籍など約300冊を刊行してきた。通常、財団法人など外郭団体が多い大学出版会だが、同大出版会は教員や学生が関わり、学内組織として活動している。同大教育学部教授の高瀬雅弘編集長は「本が売れず、出版社への持ち込み企画が受け入れられづらくなっている中、研究成果を発信できる場が学内にあるのは重要」と語る。(渡部雅士)

◇ 各学部の教員12人でつく

る同会編集委員の一人で、同大教育学部美術教育講座(デザイン)の佐藤光輝准教授のゼミ生が例年、本の装丁に取り組んでいる。学生教員がそれぞれデザインしたものや著者に選んでもらい、著者と擦り合わせをしながら最適なデザインの装丁を探っていく。業者に頼むのと違い、著者と本のデザイナーが直接やりとりできることで、著者のイメージが反映されやすい上コストもかからないという。

スタッフ不足や、コストの問題などから電子書籍化が難しいなどデメリットもあるが、高瀬編集長は「教員や学生が関わって活動している出版会は全国でも珍しい。出版社とコンタクトのない若い研究者に研究発表の機会を提供し、地域の歴史の研究成果など、地域課題に資する本を作り続けていく」と語る。

同会は、これまでの活動を振り返る展示会を5月28日まで、同大資料館で開いている。

※この記事は東奥日報社の提供です。

[問合せ先] 弘前大学出版会

hupress@hirosaki-u.ac.jp

この画像は、当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。